

## 幕末における依田七郎のネットワーク ——慶応三年を中心とした対面交流からの考察——

鈴木 壽子

### はじめに

幕藩体制内での周旋活動と情報収集を主たる任務とする、藩の渉外担当である藩留守居役は、日常多くの人々との交流を行っていたことが知られている。とくに、情報の収集と伝達が非常に重要であった幕末期の諸藩留守居役の間には共通して、時代性に即した交流関係とネットワーク<sup>①</sup>形成とが存在したのではないだろうか。しかしながら、かれらが結んでいた社会的関係の状況、すなわちネットワーク自体を対象とした研究は管見の限り、多くはない。仮に、これらの人々の結んでいたネットワークの実像が明らかになれば、幕末の政治過程・社会構造だけでなく、連続した時間軸の先に連なる明治初期の政治・社会についても、読み解けることが多いと考えられるのである。先行研究が少ない理由として、この時期の特定個人のネットワークの全体像を明らかにするに十分な史料が少ないという状況が挙げられるが、幸い、佐倉藩の依田七郎に關しては、ほぼ毎日リアルタイムで丹念につけられた依田自身の日記である「学海日録」<sup>②</sup>が残されており、彼のネットワークを明らかにするための、好個のよりどころとなる。依田七郎は、広い人脈をもち、幕末の政権危機に対し、慶応三年から四年にかけて江戸における幕府勢力挽回のために政治運動に奔走する江戸留守居役である。したがって、依田個人が、藩外のどのような社会的活動の場において交流を結んでいるのかを観察、分析することで、そのネットワークが政治活動にもつ意義を明らかにすることができるのではないだろうか。

文久期以降の京都において、朝幕と藩、藩と藩との間で進行する政治過程を個人の目をとおして見ようとしたのが宮地正人である。肥後藩留守居役上田久兵衛の書状および日記から当時の肥後藩の政治的立場を理解しようとした研究<sup>③</sup>には、朝幕融和と公儀権力確立に向けて周旋活動を重ねる上田が主として京都において交わった十一藩五六名の名が上がっている。上田の行動と思考を通して京都における政治過程を明らかにしていく宮地は、こうした交流を上田の個人的な属性に帰しているようで、とくに藩留守居役故のネットワークとして捉えようとしていないようにみえる。この点を意識

化したうえで藩周旋方に固有な人的交流網の存在を前提にし、そのネットワーク分析を通して藩の政治的立場を論じているのが大庭邦彦<sup>④</sup>である。大庭は、米澤藩留守居役宮島誠一郎の日記に残されている交流人名一覧にある人々との面談を中心に分析することから、慶応三年当時における米澤藩の、會津藩との深い関わりを核とした政治的立場を立証している。大庭が留守居役の対面交流に政治的な意義を見出している点は、佐倉藩江戸留守居役の依田七郎と直接に対面した人々との間の交流（本稿では、これをとくに対面交流という語で表すこととする）を対象にとりあげようとする本稿でも参考としたい立場である。

本稿は依田の日記のうち、彼の政治的活動が活発であった慶應三年から明治二年までを中心に取上げる。しかし、この史料は、大庭が扱った宮島誠一郎の留守居役としての任務を意識した日記とは異なり、依田の日常生活全般の記録であり、そこに綴られた対面交流も政治的活動に関わらぬものにまで及ぶ。そこで、まず、第一に慶應三、四年における依田のネットワークを示したうえで、それぞれにおける交流を観察し、その政治活動との関わりを読み解いていこうと考える。さらに、依田の背景を形成した彼の学問上の友人達との交流にも注目する。それにより本稿は、全体として、対面交流を通してみた一譜代藩官僚の幕末における社会的活動を蘇らせることにもなるだろう。

### 第一章 藩留守居役として得たネットワーク

#### 一、依田七郎の交流の場と人数

依田七郎は下総佐倉藩士依田貞剛の次男として天保四年（一八三三）、佐倉に生まれた。母は仙台藩伊達家江戸詰め藩士毛利氏の女である。藩校成徳院に学んだ後、江戸

〔キーワード〕 依田七郎／幕末／ネットワーク／新聞会／赤坂周旋社

\*平成一四年度生 国際日本学専攻

下谷の儒者藤森弘庵(天山)<sup>(5)</sup>の塾生として青年期を過ごし、朱子学、漢学を修めた。文久三年、侍読兼近侍となり、江戸藩邸詰めの藩士の教育にあたり、第一次長州出兵の際は藩主に従って上京した。その後、郡方に転じて代官を勤め、元治元年(一八六四)、藩の軍制改革に伴い郷兵頭となり、慶応二年十月に江戸詰めに転じる。

日記から彼の慶応三年から四年中の活動を跡付けてみると、慶応三年二月二十九日、正式に留守居役に任命され、江戸邸留守居局の一員となる。公務は三月に開始され、諸藩の留守居役との交際が始まり、隔月に当番として藩主の登城にお先詰を務める一方、藩政関係の手續きなどで幕府の役所や関係藩邸の事務方に向く毎日となる。同年八月初めには、弱体化した幕府勢力を回復しようとする江戸諸藩邸留守居役の有志とともに政治運動を起こす。これを本稿では「大勢挽回運動」と呼ぶ。十月初め、紀州藩附家老を盟主として、譜代藩間の連帯を目指す運動の形成に成功するが、そのさなか京都から伝わった大政奉還の報を聞き、依田らの運動は更に進展することとなった。運動は、江戸の幕閣による公認を獲得して各所での議論を広げ、諸藩重臣会議の手で朝廷の上京命令を拒否する段階へと進展した。十一月初頭、親藩・譜代藩全体を集めた紀州藩邸の会議を契機に、譜代藩四席を繋ぎ、二条城の將軍に対して、上京命令拒否と幕府支持とを訴え出るが、この運動は王政復古によって挫折することになる。徳川氏追討令以後、慶応四年二月の依田は慶喜助命嘆願状運動の中心の一人として奔走し、朝廷への上書使節に加わって上京した。その後京都に謹慎となった佐倉藩主堀田正倫の赦免のために新政府との周旋に尽くし、依田が佐倉藩公儀人に任命されて再び関東へ戻るのは、四年十月のことである。

日記には、日々交流を結んだ非常に多くの人々の名が残っている。本稿は依田の役目を考慮して、対象を慶応三、四年に対面交流した藩外の人物に絞ることにする。当該時期の日記に登場する人物を初出の時書き出したところ、依田が二年間で交流した藩外の人物は四二九名に上る。次に、交流の場をみると、留守居会、新聞会、赤坂周旋社(以上、史料に出る名称)があり、同門諸士との往来および詩画の同好会が確認できた。その外、藩の役目で赴く他藩・幕府・新政府の関係者、特定の場には分類できない他家所屬の諸士、医師、書肆、画商、自身の弟子などとの交流がある。これらは、その性格上、留守居役であるが故に結ばれたものと、それ以外に分けて考えることができる。

二、政治活動のネットワーク

二一、留守居会

日記から佐倉藩の城内殿席による固定的なグループ(留守居会)は帝席十萬石以上のうち、大和郡山、小倉(十五萬石)、小田原、福山、佐倉(十一萬石)、小浜、中津、大垣、松代(十萬石)の九藩と特定できる。留守居会の構成は時期によっても変化があり、全てが明らかにはされていないが、笠谷和比古<sup>(6)</sup>は弘化年間の例として、上記のうち郡山、小倉、大垣、小田原、中津、松代六藩が高田、庄内、桑名、忍を加えた十藩の留守居組合に加わっていたとする。慶應三年には高田以下四藩は帝席を外れて溜間詰めとなっており、組合編成が変わっていることが分かる。

帝鑑間席十萬石以上の大名家が集まる留守居会は慶應三年当時、どのような活動を行っていたのだろうか。日記から四つにまとめられる。

(一) まず各藩回り持ちの定期会合、通称「打寄」だが、これは留守会の中心であり、各家二名ずつの留守居役によって構成され、交代で接待役を務めて、役宅に同じグループの留守居役全員を招待し、飲食とともに情報交換をする「懇信会<sup>(7)</sup>」である。「打寄」を拾い出してみると表一のようなようになる。

表一 打寄一覧(慶應三年)

日	主人役(藩)	記事
3/15	野村(佐倉)	新任依田の紹介。 出席者不明
4/26	北沢(松代)	出席者不明
5/7	郡(小田原)	星野、成田、鳥居、久城、 服部、北沢出席
5/26	服部(福山)	星野、玉川、鳥居、三井、 吉田、郡出席
6/3	荒尾(中津)	依田は病気で欠席
7/25	玉川(松代)	北沢から留守居会先輩格す の間で不評につれ遠慮不 のよう忠告にされ欠席。法 評の理由は挨拶の多 劇場での解説が となど
8/7	依田	
8/27	鳥居(大垣)	依田は欠席
9/25	松下(小田原)	出席者不明
10/5	二木(小倉)	先輩格の間で礼儀をめぐ って大喧嘩勃発。玉川、 相羽、勝野、荒尾、 三井出席
10/25	勝野(小倉)	「国家の大事を外にして のみくらふ。悲しむべし」

ほほ月に二度行われ、前回に日程と主人役が決められる。就任時期の早い者が先輩として重きを為し、献杯の方法等にも多くの習慣があつて、席上「大喧嘩」に至るトラブルも発生したようだ。(十月五日条)

(2) 相撲や芝居、狂言見物、四季の花見などや少人数での飲み会などの付き合いも行われている。一例を挙げておく。

夕方より芝浜にのむ。来会するもの、中津ノ荒尾、星野、小田原ノ玉川、松代ノ松下、郡山ノ久代、及余、野村なり。海上の風景いはん方なし。鮮魚亦他方の比あらず。

志同じからん人と来らましかばと思ひしなり(傍線は筆者による。以下同様)

表1の七月二五日の項のように、好きな劇評で先輩格の不興をかつたこともあり、右に引用した史料の傍線部にも、同志の者と来れば風景も料理も、心から楽しめるのと残念がる依田の様子が見え、付き合いが依田には苦痛となるものであつたことが窺える。

(3) 次の史料にみるように、時勢を反映した見学会もある。江戸大下水沿いの関口村に設けられた幕府の大砲鑄造所の見学である。

玉川、星野、渡辺、鳥居、服部、成田、久城、郡、三井九人と関口村の鑄炮所を一覧す。水車の力を以て炮口を鑽開し、炮筒中の弾道を鑿つ。その巧、驚べし。器械皆彼より来れるよしなり<sup>⑩</sup>

(4) 暑中見舞い、寒中見舞い、火事見舞い、それらの答札、類役の就任、離任、転勤などのある度に留守居会メンバーとの往来があり、近所を通れば挨拶に立ち寄り合う。合間には気の合う類役同士での半ば私的な集まりも盛んで、全般にいわゆる付き合いはかなり多忙である。

当時の依田の最大の関心は危機に直面する徳川政権の大勢を如何に挽回するかであり、人の集まる場において彼が望んだのは、それに関する建設的議論であつたと考えてよい。ところが、依田の日記に残る打寄一覧を見ても、構成員が九家二名の類役に固定され、慣習に倣つた懇親を目的としていた打寄に、政権危機を論じる空気はなかつたようである。

かねて若州の成田と約することありて、此日、郡山ノ吉田、松代ノ北沢、膳所ノ福田、丹羽ノ那須、本多ノ名島等と舟行して、例の留守居会のことを為さずしてともに心事を論ずべしとて萬年屋てふ舟店に至りし所(後略。九月廿日条)

右の史料によれば、依田は留守居会例会の日に、成田、吉田、北沢の留守会中の同志に新聞会員と思われる他家類役を加えて、大勢挽回運動を論じるため、舟中で会合

を行うという別行動をとっている。このことから見ても、留守居会活動が政治的危機への対応機能を持つていたとは思われない。

さらに、大政奉還を聞いてさえ、会の基調は変化していないことが十月二十六日の日記から読み取れる。午後より小倉の勝野宅で打寄が開かれた。ところが、会は「国家の大事を外にしてのみくらふ、悲しむべし」(十月二十六日条)という有様であつた。

鑄砲工場見学の例のように、一方では危機を意識していたと思わせる行事もありはするが、実際の留守居会行事は文字通り懇親会であつたようである。十月二十六日を最後に「打寄」は姿を消す。十一月、上京拒否運動形成後は、重臣会が政治的討議の場となり、一留守居会の枠を超えた帝鑑席全体が政治行動の単位となる。<sup>⑪</sup>

依田が対面した八藩の留守居役のうち、小田原藩の日治孝太郎、小浜藩の成田作右衛門は譜代藩の連帯運動における依田の同志となる。また、松代藩の北沢職之介(冠岳)とは、主として、趣味である詩画の会を通じ、個人的な付き合いを深めていく。

## 二二二、新聞会

表12は、新聞会の全活動の記事一覧である。表の記事が空欄のものは、日記に会開催の事実のみが残る場合である。依田は上司平野知秋の指示により、前年の慶応二年暮れ、発足前の顔合わせから加わつた。平野は自ら会の準備段階に関わつたと考えられるが、それについては未調査である。依田は会の帰路には平野のもとに立ち寄ることが多い。会は依田を含めわずか五名(紀州藩武内孫助、片桐家杉本心平、明石藩下田三郎、米沢藩上与三郎および依田)で出発したが、慶應三年を通じ、次第に拡大していく。表からは次の点を読み取れる。①会は毎月一日に、紀州藩邸内の武内孫助宅で開かれ、国家的なレベルの情報から巷間の噂まで様々な「新聞(情報)」を知ると共に、内外の「新聞(情報紙)」を回覧して写し合うのが主たる活動であつた。②九月二日以前、情報はかなり雑多であり、会がとくに政治的活動のネットワークとして機能した様子はない。③しかし、九月二日以降、その様子が一変し、政治的に重要な場としての機能を果たすようになったことがわかる。当日依田は会の席上紀州藩重臣と対面し、大勢挽回運動を起すことへの理解を取り付け、十月十日、紀州藩用人を通じて、正式に支持を獲得している。④大政奉還後の十一月二日には譜代藩の連帯形成を実現する運動の頂点となる紀州藩邸大集会開催が議論されている。

日記の記事を追うと、十月十日と十一月二日の間に、運動は大政奉還によって性格を変えるが、そのうち最も重要な十日間を動かしたのは新聞会と紀州藩であつた。藩

表-2 新聞会活動一覧

月日	記事	参考
1/6	新年会を兼ねて。出席者:杉木、上、下坂、武内	発会は前年末
11		
2/1		
11		
21		
晦日	武内、英人サトーに会う。「極て邦語をよくして議論を好む」と。	翌日欠席の断りに
3/11		帰途、平野宅へ
4/1		平野宅へ
11	赤坂一木の妓お半が男を刺す	
20		
5/1		平野宅へ
11	「京師風聞、慥に聞へたり」4/17 幕府の異人入洛許可で、伝奏、議奏辞任へ。	
21	「儒官榊原先生に謁す。議論、尤も愉快なり」	
6/1	「京地の新聞多し」	
11	「いたはることありて」欠席	
22	武内体調不良で欠席。暑中の贈答やりとり。	
7/3	東条某(因州)より、上海で浪人八戸が大船団をもって朝鮮を討つべしと言ひ、朝鮮より対馬侯へ鎮静を求めて来たと聞く。	
11		
21	一昨夕、下目黒祐天寺に盗賊。賊中に佐倉浪人。	
8/2	京で幕臣玉虫留次郎、土藩人と口論し斬られる。	
10	藩内の公務で欠席	
21	有馬家佐々、武藤出席	
24	武内に使いをやり、「原市之進害される」と返書あり。	詳細は営中坊主より聞く
9/10	東条、首藤(肥後)、武藤出席	
21	紀州藩斉藤政右衛門と初対面。依田が「国勢挽回」を説き、大いに賛同を得て、斉藤よりこれを周旋すべしと。京においてと同様、ますます盛んにしなければならぬと認識。武内も尽力すると。	9/16 京都での親藩会(8/11 開催)を聞く
10/1	武内来訪	
10	紀州用人岡田に会う。紀州が正式に国勢挽回運動をバックアップ。「親藩、内藩必ず服従して一致の力を極め、幕朝の御勢、古へにかへらせ給ふこと、是を企てまつべし」	
22	武内に会う	10/20 依田、大政奉還を聞く
11/2	幕府権力奪回と上洛拒否などを議論するため、紀州藩邸大集会が決まる	集会は3、5両日
21	出席者大勢で、銘々新聞を謄写。会合後、内山(島原)、名島(膳所)はじめ7人の留守を赤坂周旋社の人々に紹介する。「人々大に喜き」	11/18 使節上京し、運動後初会合
12/2	盗賊横行のこと。「朝議、弥復古のことを定められて、諸藩をして八省寮司に加らるべきよし也」	
10	鈴木房太郎(戸田淡州家)より、薩人府内放火計画が知らされるが、証拠は不分明と。撒兵隊、霊岸島で強盗に襲われる。	
21	納め会。二本松和田右文に会う。	18日、王政復古を聞く

主惣登城のうえ書付五通により大政奉還が正式に知らされた翌日の十月二二日、依田は紀州藩邸へ行き、紀州藩士武内、榊原、用人岡田、付家老新宮水野家の飯田に会う。密談後、岡田は御三家と發議に赴き、依田、榊原、武内は紀州藩家老斎藤政右衛門とともに、譜代藩有志を集めて大議論を起こそうと決定する。さらに、斎藤は幕閣への根回しを図る。二三日、譜代諸藩主に登城命令が出て、今回の危機に当たり譜代家の連合が不可欠との老中達しがあった。翌日から、公認となった運動を進めるため、依田は新聞会員の諸家留守居役と会い、それぞれが拠点を作るなか、依田は彼らと紀州藩邸との間を繋ぐ。ところが、二五日に朝廷の上京命令が飛び込む。そこで、依田は依然意識の低い留守居会を無視し、小浜藩留守居役成田作右衛門のみと議論を深め、成田と新聞会員を繋ぐ。二九日には紀州藩邸で水野家家臣や武内、幕臣数名を加えて議論を深める一方で、老中である松山藩板倉家留守居役の川田毅が佐倉藩主と上山藩主の会談を準備するなど、運動は拡大を続け、十一月二日、前橋藩留守居役久松白堂の提案から八四家による城内外厳戒態勢が敷かれ、その下で、譜代四殿席を結ぶ紀州藩邸大集会開催が決定されたのである。

藩の枠を超えて人々が集まる新聞会は、政治運動の拠点として、以後さらに多くの有志を集め、依田はその感慨をこう記している。

此会、去年の十二月に初りて、その折は僅ばかりの人なりしに、かくまでの大集  
 ならんとはいかで知るべき。実に測りがたき世の中のことぞ。<sup>(15)</sup>

十一月二日には会の七名の留守居役が他の政治的グループ（赤坂周旋社）にも加わり、ネットワークの拡大と発展が確認できる。新聞会は王政復古後、年末の納会を最後に活動が確認できなくなることから、その政治的機能はその時点で終了したとみる  
 ことができよう。

### 二二三、赤坂周旋社の会

八月十二日条に、「武藤氏来ル。明十三日赤坂門外の酒樓にて周旋家諸君尽く会して雄論を為すべきよしの告あり」とある。依田をこの赤坂周旋社と称される会に誘ったのは、藩邸が近所で、就任以来親しく交流していた久留米藩留守居役の武藤里次郎であった。以下、赤坂周旋社関連の記事を追ったのが次の表―3である。

表―3 赤坂周旋社の会活動一覧

月日	記事	備考
8/13	薄暮、赤坂門外の酒樓にて。20余名出席。質実儉素な会であった。会后、榊原耿之介（紀州）赤坂某（清水家）と飲む。	
9/13	未後、赤坂吉田屋にて。石沢、栢崎（会津）水野（尾張）榊原の名あり。	
10/13	「例の赤坂の周旋社の会日」。久松矢一郎（前橋）と初対面。8/11の京都での大勢挽回を謀る親藩の秘密会合は久松と三浦五介が実現させたと聞き発憤する。中島嘉左衛門（肥後）下坂金次郎（筑後）の名あり。	9/16 京都梅尾で8/11に極秘親藩会が開催されたと知り、大きな衝撃を得る。（神山情報） 10/13 京都で大政奉還。 10/20 江戸で公表
11/10	「榊原、久松等八人と吉田樓に会議す」	11/3～5 紀州藩邸の大集会
11/13	「赤坂吉田屋周旋会」二十余名出席	
11/21	吉田屋にて、依田が席を設けて、新聞会の有志七名を周旋社諸士に引き合わせる。	11/18 帝鑑席代表の佐倉藩重臣一行が上書を携帯し江戸を出発
12/13	午後。「会する者甚少し」。川村惣十郎（幕臣、元一橋家）が初めて出席。	12/9 王政復古 12/18 江戸で公表

表からは次の点が指摘できる。①月の十三日に、赤坂門外吉田屋において定例会として開催されたが、会合は計五回のみであり、江戸での大勢挽回運動の始まりに重なる時期に開始し、王政復古と同時期に消滅している。②新聞会に比較して家格の高い、親藩および溜間席諸藩と当時幕府支持の諸藩周旋方により構成されており、時期から見て、一時的に政治的な目的をもって作られたと思われるが、その集会での議論の内容は記されていない。また会は、前橋藩松平家の久松白堂らが八月十一日に京都で召集したという親藩の秘密会合と何らかの関連があったのではないかと思われるが、推測の域を出ない。

依田の日記の十一月五日条に、紀州藩邸大集会後の方針決定会議では会津、庄内、桑名等有力八・九藩が大議論を交えたのを見て、依田らが新聞会を拠点として目指した譜代藩四席の連帯による大勢挽回・上京命令拒否の上書運動をまとめる指導的立場にいたるのは、直接連帯に参加していない紀州藩を初めとする親藩および譜代最上席の溜間詰諸藩であった。それらは、赤坂周旋社の会の構成とも重なりを見せる。表を見ると、十一月十日、依田を加えた十名ほどのリーダーの間で密かに会議が行われているが、運動の最終段階における重要な内容であったことが推察され、翌日、依田は初めて上席の忍藩邸を訪ねて、溜間席の戦略をきいている(十一月十一日条)。赤坂周旋社に連なるネットワークの果たした政治的機能は運動を外側から束ねることにあったのではないだろうか。会は十一月二一日、政治運動の頂点において新聞会と接点を持ち、拡大している<sup>16)</sup>。より深い政治運動過程の分析が求められるが、紙数の限りもあり、それを論じることは今後の課題としたい。

新聞会と赤坂周旋社には、有志留守居役が個人の意思で、ある程度自由に参加していることがわかる。構成員が固定され、閉鎖的なネットワークである留守居会に対して、この両者は、藩や既成の制度の枠を超えた広がりを持ち、個人の立場による参加を許容し、相互に接点をもつ意味で発展的開放的と言える。例えば新聞会が、京都での政権支持のための親藩会合開催の事実を聞いた九月十九日以降、大勢挽回運動を積極的に推進する基地に転じたことに見られるように、遭遇した新たな政治的情况により活動を柔軟に変化させ、その情況打開に対処していく様子が見られることは、留守居会と対照的である。新聞会と赤坂周旋社は、体制の危機に直面し、共通の政治的関心により、藩の枠を超えて時代的な課題解決を目指す政治的活動のネットワークとして注目しておきたい。

表—4 交流頻度上位二十名

氏名	慶応3・4年 二年間の交流 全月数	内訳			実回数	所属藩	
		3年中	4年 1・2 月	4年3 ~12 月			
武内 孫助	15 / 25	11	2	2	40	紀州	新聞会
神山 衛士	13	9		4	26	尼崎	元佐倉藩士
北沢 冠岳	12	6		6	33	松代	留守居会、同好
川田 毅卿	11	9		2	24	松山	同門
日治 孝太郎	11	5	2	4	16	小田原	留守居会
岩谷 瀧之助	9	7	2		11	越前	同門
佐々 治	9	9			11	久留米	赤坂、新聞会
小出 作平	8	8			12	出石	同門
郡 権之助	8	7	1		14	小田原	留守居会
成田作右衛門	8	8			20	小浜	留守居会
坂田 莠	8	1		7	18	高鍋	同門
小永井五八郎	7	6		1	7	小倉	同門
武藤 里次郎	6	6			15	久留米	赤坂、新聞会
鈴木 才蔵	6	6			12	延岡	同門
松下良左衛門	6	6			9	小田原	留守居会
西村 鼎	6	1	1	4	11	佐野	佐倉支藩
荒尾	6	6			9	中津	留守居会
星野 平八	6	6			9	中津	留守居会
玉川 一学	6	6			13	松代	留守居会
榊原 耿之介	6	6			18	紀州	新聞会、赤坂

二一四、頻繁に交流した人々

日記に登場する他家藩士二九八名を人物毎に取り出して、慶應三、四年中の二五ヶ月間（四年は閏月あり）に對面交流した月数を数え、上位二十名を順に並べたのが表一四である。実回数よりは、交流が恒常的であるか否かを重視したため月数をとったが、参考として回数も挙げておく。上位を占めた人物は留守居会、新聞会および同門ネットワーク中の人物に附合し、これらが当時の依田の交流の核である。内訳に慶應四年一・二月を独立させたのは、一月の將軍の江戸帰還後、二月が徳川慶喜助命嘆願運動の時期に当たるためである。

活発に活動していた新聞会員に頻度の高い者が少ないことは意外にも見えるが、武内、榊原との対面内訳にみるように、ここでの交流は密度が濃かったが、慶應三年の一定時期に集中していたことを示すのではないかと考えられる。依田にとつて、三年三月以後定期的であつた留守居会の会合が、その後約半年で消えていることもわかる。通常の留守居会での各種の懇親を通じての対面頻度は横並びで、継続五、六ヶ月程に留まるのに対して、北沢冠岳、成田作右衛門とは交わりが深く、佐倉藩が慶應四年二月の徳川慶喜助命嘆願哀訴運動まで行動を共にした小田原藩との交流が続く様子も読み取れる。北沢、小田原の日治孝太郎とは依田が京都に滞在中も親交がある。

次に、表中下線を引いた人々についてだが、久留米藩の佐々治と武藤里次郎は藩邸も近所で、藩同士の交際が深く、政治的関心も共通であり、赤坂周旋社と新聞会を相互に紹介し合う仲である。日頃も兄同様に交わる親戚藩（佐野藩）留守居役の西村鼎は共に慶喜助命嘆願の使者を務めた人物である。尼崎藩の神山衛士は依田の藩校時代の友人で、（佐倉藩士立見氏子弟。尼崎藩家中の養子）留守居役に就任したばかりの依田が、上司である江戸家老平野知秋から新聞会参加と並んで、深く交流して情報源とするよう指示を受けていた佐倉藩の情報活動の支えである。慶應四年の京都では、旧友としての交際を続けている。以上の四名は、依田の政治的活動においても重要な人物である。表一四には、さらに、学問の同窓である人々も名を連ねているが、これらの人々との交流観察および政治活動との関わりについては、次章で探ってみよう。

## 第二章 藤森天山塾同門生のネットワーク

### 一、交流の諸相

ここでは、留守居役としての立場に拠らず形成されたネットワークを取り上げること

にする。幕末の政治的危機における公務に多忙を極めるなかであっても、依田七郎が最も大切にしていたのは、青年時代から研鑽を共にした藤森天山塾の同門生との交流および趣味の詩画の会であった。まず、詩画の同好の人々との交流だが、全員が号で登場するため所屬などが特定できない。定例会はなさそうであり、「江都紀勝の刻始るよしを告ぐ」（五月十八日条）など情報も趣味の範囲に限られている。

次に、慶應三、四年の日記で確認できる藤森天山塾同門は以下の人々であるが、日記全体からは更に数名以上が確認できる。

鈴木才蔵、四屋義三郎、土肥謙蔵（以上延岡藩） 坂田秀（高鍋藩） 大野又七郎（唐津藩） 小永井五八郎（小倉藩） 小橋恒蔵（肥後藩） 正木氏（土佐藩） 川田毅、吉田謙蔵（備中松山藩） 丸川茂義（備中新見藩） 小出作平（出石藩） 伊奈平八（姫路藩） 片岡美伸（丹南藩） 小崎公平（伊勢亀山藩） 大野俊次郎（新発田藩） 岩谷瀧之助（越前藩） 松下誠庵（尾張藩） 三坂新太郎（浜松藩） 渥美忠吉（宇都宮藩） 保岡正太（前橋藩） 城崎誠輔（玉川在） 小林但見（上毛） 増田円三（不明） 藤森周蔵（恩師子息） 駒井甲斐守（幕臣陸軍奉行）、古川朔之助（幕臣） 窪田豊之進（駒井家） 泉新九郎（新撰組）

・は消息のみ

依田の日記に現れる塾の同門諸士は、幕臣から全国諸藩にわたり藩重臣層も含む範囲の広さが特徴的である。藩留守居役を務める者も多い。接触頻度も高く、相互に消息を確認しあう強い繋がりを保つ。対面交流の一部を日記から拾い出して観察しておくことにする。

久しぶりに江戸詰となつた依田は二月から三月にかけて頻繁に旧友宅へ足を運び、旧友たちも、他の仲間を誘つて依田宅を訪れる。一人が訪ねてくれば、他の者にも声をかけ（四月廿一日。午後川田毅卿をとふ。けふは折よしとして、小永井氏をとまひて春好亭にのむ）、詩を交換しあい、本を貸し借りし、朝まで遊ぶことも希ではない。外回りの公務の途中、以前下宿したことがあり、今や陸軍奉行となつてゐる駒井甲斐守家で休憩を取つたりもする（三月廿五日条）。仲間同士の消息を聞くことも多い（五月九日。高鍋の坂田秀来ル。秀、近來坂都の留守居をかふむるよし也。旧友小崎公平も近頃石川家に用らるゝよしをきく）。座談中に留守居役としての情報収集に寄与する話題が出ると、その裏をとるため他の同門生を訪ねることもある。例えば、六月四日には、幕臣の古川が来訪し、土佐、宇和島、薩摩と將軍家の情報を得、同六日には延岡の鈴木才蔵に幕閣人事を聞く。七月十二日に鈴木から、長・防のことを詳しく

聞いた翌日は越前の岩谷を訪問し、関連情報を求めている。留守居会の北沢を加えて、川田と日暮れまで文学談義をし（八月廿六日条）、岩谷と観劇後、岩谷宅で仏国行の日記を見て過ごす（九月五日条）など文化的な時間も濃密である。亡き師に対する恩も忘れず、祥月命日には、夫人を自宅に招き数日間妻子ともども歓待している。

以上から、同門ネットワークが、依田にとって、共に愉しむだけでなく、信頼に結ばれた時勢に敏感なエリート達と確実な情報を自然に交換できる場であり、全国に亘る政治情勢を把握するために欠かせぬ場でもあることが窺える。留守居役に就任した依田が、ある程度意識的にか、九州諸藩邸の友を訪ね、情報を求める様子も見られる。新たに交わりをもった、依田の異なるネットワーク中の人物同士が、次第に結びつく様子も観察できる。例えば五月十九日、上京する坂田の送別会に留守居会の北沢冠岳も参加し、同じ北沢が川田と詩画の同好として交流している。

ここまでは、主として慶応三年、大勢挽回運動が紀州藩重役に支持を得て始動する以前をみたものである。次に、遡って安政六年の日記からも、同門生間の交流の様子を拾い、比較してみよう。

安政六年七月六日には、「北史載記」の注釈についての松本誠庵（尾張）の私見、小崎公平の梅田氏の詩作能力批判、恩師が髪結床で仕入れた話等を記す。七月七日には川本三省とともに松本を訪問し小酌後、赤羽で「徘徊」する。同十六日、恩師藤森天山を見舞う。その後も頻繁に川本と飲み、二十九日には再度、恩師を訪ねている。八月十五日、小崎ら三人が来訪する。同十七日には、川田剛（毅）が来訪。川田とはその後何度か共に過ごし、佐久間象山の噂を聞いたり、本を借りたりしている。安政大獄に入牢となった師天山の裁きの行方を尋ねて伝馬町へ通い、中追放決定後行徳まで恩師を送っていくのも門下生である。

交流は慶応三年の例と同質であり、ネットワークのあり方が、この間の社会的な情勢変化に連動して変質した様には思われない。彼らは、引き続き、相互に自由に往来し、恩師とその家族への配慮も変わらない。

## 二、同門ネットワークの機能と性格

慶応三年後半の依田の生活の中心的活動は大勢挽回・上京拒否運動であった。このネットワークに属している人々が全国に広がり、諸層に跨っていたことには、それなりの政治的意味があったのであろうか。

慶応三年の日記の範囲で、依田が獲得した情報のソースを一覧すると、内容まで書

き記された情報（藩内政関係は除く）は八三件あり、情報源は機関名七、個人名四五が確認できる。情報の内容は、全国的な政治情勢に関するもの三四件（うち対外三）、他藩の内情一五件、人物論・人の異動一九件、社会十件その他に大別できる。社会に関してはほとんどが新聞会で得た情報である。他藩の内情や人物論・人の異動に関しては同門の人々を情報源とし、個人名では四五名中十一名二四・四％を占める。依田にとって、同門ネットワーク内の交流は、少なくとも留守居役としての情報収集活動に、ある程度まで寄与していたと考えよう。

では、大勢挽回・上京拒否運動においても、機能したのだろうか。同門の人々との対面交流頻度を時期毎に比較してみると、表一5のようになる。（但し、一月の日記には交流の記録がない。）

表一5 同門の人々との交流頻度

期間	延回数	延人数	実人数
2～4月末	24	22	12
5～7月末	21	14	9
8月～10/22	22	16	11
10/23～12月末	15	10	5

まず、四月までは、江戸での旧交を温める時期でもあり、交流が多い。五～七月は、新任の挨拶回りを終え、ごく通常の公務が中心の時期である。一ヶ月に七回の割合で対面している。政治運動形成期の八月～十月二二日でも、対象日数は数日少ないがほぼ同様である。その内容については前節で観察したとおりである。次に、譜代藩の連帯が幕閣の後ろ盾を獲得した十月二三日以降、運動の進行と挫折に重なる年末までを観察すると、同門間の対面交流はかなり減少している。しかし、この期間に十五回中九回川田毅と会っていることは特筆すべきである。遊び仲間の川田だが、運動拡大の時期にあたる十月末には松山藩板倉家の留守居役として、他の留守居会に属する上山藩と佐倉藩を結んで帝鑑席内の留守居会の枠を広げるための周旋役を担うなどの重要な活動をしている。運動最盛期の十一月では、同門の人物で依田と会ったのは川田一人だけである。全国に広がった同門の友人達は、それぞれの藩によって政治的立場が異なっていると思われるが、依田が奔走した場合は譜代藩の連帯による幕府支持の運動であり、外様藩を含む全国諸藩出身者により形成される同門ネットワークは、もともとその共通基盤と成り得ないのである。

その他の例としては、慶應四年二月から三月の徳川慶喜助命嘆願運動の際上洛し、その後半年同地に滞在していた依田が、京都で地盤を持たない佐倉藩の公務人として働



く助けとなったのが、偶々元高鍋藩主秋月右京之介の下で新政府の議事院議長を務めていた坂田秀であったことがあげられる<sup>(9)</sup>。また、戊辰戦争の混乱のなか松山藩主板倉勝静父子の行方を求め決死の探索を行う川田毅の窮地を、依田は、商人大文字屋得(徳)二郎のつてを利用して密かに助けている。何れの場合も同門としての縁が、政治的状況の打開に寄与した例であるとしてよいと思われる。維新の混乱期には、日記の各所に彼らがその所屬を超えて相互に旧友の消息を確認し合う様子が見られるが、それが、同門ネットワークの本質を現すものと考えられる。

藤森天山塾の同門は、地域的にも階層的にも広がりをもつ。彼らの多くは新規に諸藩に留守居役として登用されており、政治能力の高さには一定の評価があったと見ることが出来る。しかし、このネットワークには、共通の政治目的により諸藩を横に繋ぐという、政治的機能は見出せなかった。時代的な情勢変化による本質的な動揺を受けることなく継続することにおける交流は、趣味の会と同様の範疇に入れてよいだろう。

## おわりに

依田七郎が対面交流を結んだ人的関係において、留守居会および学問の同窓・趣味の会に見られるようなネットワーク形成は幕末社会に限らず、見ることが出来る。これに対して、新聞会・赤坂周旋社は、幕末の慶応三年という時期に限って現れており、依田の政治行動とおして時代を読み解くための鍵を握る、いわば第三のネットワークとも呼べる存在であったと言えるのではないだろうか。

従来の幕末政治史研究において、慶応三年という時期は大政奉還と王政復古をめぐる政治過程への関心が中心であった。したがって、研究は京都での政治過程の解明を主とし、その間將軍不在の江戸で何があったのかについては、ほとんど関心が払われてこなかったのではないだろうか。しかし、本稿は、依田にとつて留守居役という役目に由来して形成されたネットワークである留守居会および新聞会・赤坂周旋社について、その構成、活動の実態をみるなかで、徳川政権の最後の立て直しを図ろうとする人々の政治的な動きと、その動きに参加した人々の存在とを確認した。留守居会は幕藩体制の制度内で藩の立場を維持していく上に必須のネットワークであるが、体制の危機に対応する政治力を発揮し得ない点で、限界があった。佐倉藩はその時代的欠陥を補うため、依田に新聞会参加を指示しており、新聞会のネットワークは危機を強く意識

する依田にとつて、政治活動の最大のよりどころとなる。また、慶応三年の政治情勢は、これに対応しようとする幕府支持の有志諸藩留守居役の間に赤坂周旋社の会を生み出していった。政権危機を明確に意識するこの両者、すなわち依田七郎の第三のネットワークこそは、依田の関わった政治運動解明への手掛かりとなるものであろう<sup>(12)</sup>。

## 註

- (1) 本稿で用いるネットワークという用語は、パーソナルネットワークすなわち、個人のもつエゴセントリックネットワークを意味する。エゴセントリックネットワークとは、任意の行為者がその周りに取り結んでいるネットワーク(安田雪『実践ネットワーク分析』新曜社二〇〇三、「ネットワーク分析の基礎用語」による)である。
- (2) 学海日録研究会編『学海日録』(岩波書店、一九九二)安政三年、二七歳より明治三四年、六八歳までの個人的な日記である。
- (3) 宮地正人『幕末京都の政局と朝廷』(名著刊行会、二〇〇二)
- (4) 大庭邦彦『慶応期米沢藩の諸藩周旋活動』宮島誠一郎・慶応二年日記の検討を中心に(由比正臣編『幕末維新の情勢活動と政治構想』宮島誠一郎研究(梓出版、二〇〇四)所収。宮島誠一郎は、一定の時期に交際のあった人物名を列挙する作業を繰り返しているが、そのうち幕末期慶応二三年の日記に記されたものを中心に分析したのが大庭論文である。
- (5) 儒者。一七九九—一八六二。江戸下谷に開塾。ペリー来航時「海防備論」を建白。徳川斉昭に「新政談」を呈す。安政大獄に中追放となり後病死。
- (6) 笠谷和比古『近世武家社会の政治構造』(吉川弘文館、一九九三)
- (7) 慶応三年五月七日条。『学海日録』第二卷一三三頁
- (8) 同四月十四日条。一一九頁
- (9) 現在の文京区関口。
- (10) 同四月十九日条。一一〇頁
- (11) 同十一月六、七日条。一六五頁
- (12) 依田が対面した八藩の留守居役は、以下の人々である。  
松下良左衛門、郡権之助、日治孝太郎、畔柳、堀江覚左衛門(小田原) 吉田良之進、服部、久城準輔、茂木良左衛門、野口左織(大和郡山) 二本頼母、宇佐美新、勝野兵馬(小倉) 成田作右衛門、三井二郎左衛門、糟谷斗平(小浜) 荒尾、星野平八、磯貝瑞枝、森源蔵(中津) 鳥居伝、桑山豊三郎、

鈴木 幕末における依田七郎のネットワーク

- (13) 相羽辰之進、喜多村寛司(大垣) 渡邊三平太、伊木市左衛門(福山) 玉川一学、北沢轍之介(松代)  
(13) 上海新聞も回覧されている。
- (14) 十一月廿一日条。一七〇頁
- (15) 新聞会員であると確認できる人物は以下の通りである。  
武内孫助、榊原耿之介、斎藤政右衛門、渡邊氏(紀州) 飯田鞭尾(新宮) 杉木心平(片桐家) 下田又三郎(明石) 上与三郎、湯野川義次郎(米澤) 首藤敬輔、澤村修藏(肥後) 佐々治、武藤里次郎(久留米) 内山四郎兵衛、名島四郎兵衛(島原) 和田右文(二本松) 東条某(鳥取) 鈴木房太郎(宇都宮) 福田雄八郎(膳所) 鈴木才藏(延岡)
- (16) 赤坂周旋社の参加者であると確認出来るのは次の人々である。  
佐々治、武藤里次郎、吉田半(久留米) 榊原耿之介(紀州) 赤坂某(清水家) 水野氏(尾張) 石沢民衛、榊崎才一(会津) 久松矢一郎(前橋) 三浦五介(?) 中島嘉左衛門(肥後) 下坂金次郎(筑後) 十河鑑二郎(備中松山) 名島四郎兵衛、内山四郎兵衛(島原) 川村惣十郎(幕臣もと一橋家)
- (17) 慶応三年一月二日および六日条。『学海日録』一〇一、一〇二頁
- (18) 安政六年十月廿二日に刑が決定、廿八日、大野又七郎と小橋橋園が送っていく。(四九・五十および五二頁)
- (19) 慶応四年三月三日に坂田と再会。その後、頻繁に往来している。
- (20) 四年五月四日条以下九月まで十八か所に亘り関連記事がある。川田の追悼文(『太陽』六号、明治九年)には詳細が綴られている。
- (21) ここでは議論しないが、これらのネットワーク中の人物は、前掲の米沢藩留守居役宮島誠一郎の交流人物にも重なりが見られる。

(二〇〇七年一月二日受理)

# An Aspect of Personal Network in 1867-68 :

## Specifically Observed in the Case of Yoda Shichiro

SUZUKI Kazuko

### abstract

The present article is to introduce the personal network of Yoda Shichiro, who worked for Sakura-clan as Edo-Rusuiyaku and played an important roll in political movement supporting the Tokugawa-government in 1867-1868. The study, through the observation how and in what social field his network had been formed, would throw light to an aspect of Bakumatsu-society where Yoda actually lived . In his diary 429 people from outside Sakura-han who met him during the years 1867-1868 are found, and his main human relation networks can be categorized as follows.

- 1) Formed owing to the duty : Rusui-kai
- 2) Formed privately : Alumni of Fujimori-Tenzan-School and Associates of poem and art
- 3) The third network: Shinbun-kai and Akasaka-Shusensha

The networks 1 and 3 are both derived from Yoda's political duty. Comparing to 1 which is the traditional institute to keep the establishment, 3 are the networks born from the needs of time of crisis among the interested going over the fences of old rules. Group 3 could be the key to read the process of the political movement where Yoda was deeply involved.

Keywords : Yoda Shichiro, Bakumatsu, personal network, Shinbun-kai, Akasaka-Shusensha